

鹿児島県，高齢者婦人の衣生活に
おける色彩嗜好

Notes on the Tastes of Aged Women for Colour
in Clothes in Kagoshima Prefecture

文 田 哲 雄

北 村 ト モ エ*

Tetsuo FUMITA

Tomoe KITAMURA

(Received Sept. 16, 1982)

In view of the importance of colour in clothing culture, we examined the sense of, and taste for, colour of aged women (fifty-one women in their fifties, thirty-four in their sixties, and thirty-five in their seventies) by using as subjects of our examination their one-piece dresses for summer wear.

The following are the results

- (1) *Orange* (2.5 YR 6/14) is a colour which is generally the least liked by both aged women and young ladies in their twenties. This accords with the results of the other examination (Tachibana's *Report*) which has been made since 1930.
- (2) *Brown* (5 YR 5/6) and *purple navy* come to rank higher as women grow older, esp. *Brown*. *Brown*, which ranks seventh in the case of ladies in their twenties, come to rank second in the case of aged women in their seventies, and *purple navy*, which ranks fifth in the case of young ladies in their twenties, ranks first in the case of aged women in their seventies.
- (3) *Beige* (25 Y 8.5/2) ranks first and *purple navy* second, *blue* third in the case of the group of aged women.
Beige, which is highest in the case of the aged women, stands second in the case of young ladies in their twenties, and as for *blue*, aged women and young ladies have in general nearly the same taste for it.
- (4) Taste for colour of women in their fifties is almost of the same nature as young people in their twenties.

I 緒 言

先に、鹿児島県における高齢者婦人の衣生活が、社会環境の推移によりどのように変化するかを知るために、衣服の色彩嗜好について研究調査を行ったが（研究年報第10号、鹿児島県立短期大学地域研究所、1981）、今回は調査項目のうち、資料考察が未発表の「嗜好要因」「洋服を着はじめた年代」を加え、色彩嗜好について資料の再考察を試みた。

高齢者の精神的、身体的、並びに社会生活の側面については、老人学、医学、心理学等の分野において多くの研究がなされているが、家政学的な見地からの高齢者衣生活の研究は少ない。また、色彩については、色彩心理学会において1926年に水口、青木等に始まり、多面的な報告がなされているが、高齢者の色彩嗜好に関する研究は、老年学において橋による嗜好順位についての報告があるに過ぎない。これらの報告結果は今日、衣生活状勢の推移と共に変化したと推測される。そこで、高齢者婦人の衣生活における色彩嗜好を調査するため、夏のワンピース・ドレスをテーマにとりあげた。

調査は、カラーペーパー8色による嗜好順位付けを行い、その結果の1位、8位の選択要因が順位決定にいかに関与するかを、SD法によるイメージの評価により検討した。

II 研究資料・研究方法

1. 服色嗜好調査票（表1-1）には、色彩嗜好調査の項の他に、被験者の生活背景の手がかりを得るため7項の調査項目を設定した。
2. 被験者は、鹿児島市街地域と近郊農林漁業地区および、その他に居住する成人女子の中から無作意摘出法による、50才代（66名）、60才代（54名）、70才代（43名）と、20才代（126名）計289名を調査対象とした。高齢者の対象年齢は、洋服の着装が、社会生活に何らかのかかわりのある年齢として、前述の3区分を高齢者群（A群）、20才代を若齢者群（Y群）とし、この両者を比較検討することにより、高齢者の年齢推移による嗜好変化の動向とその問題点を解明しようとした。
3. 1910年～1970年にかけての日本の洋装史の背景を考察すると、実用目的から洋服を着装しはじめた和魂洋装時代から、一時、底迷期を通り、再び開花期を経てようやく洋装化の定着をみることができ、工業化時代の豊かな国際的衣料市場を得た今日に到っている。

図3に示されているように、1920年代において鹿児島県では、50才代の55%の人々が0才から洋装を始め、同時期において60才代は10才になっており、44%の人々が、また、70才代では20才の成年に達し、その37%が洋服を着装し始めている。

この時代が日本全体は言うまでもなく、鹿児島県においても洋装普及時代に入っていたことがわかる。

4. 色の試料(表1-2)は、予備調査で得た着装の希望色11色と、市場から収集した夏のワンピース・ドレスの生地106色、および既製ワンピース・ドレスの50色を、布地全体の主調色を中心に、マンセル色票と照合した中より、有彩色の8色を選定した。

この8色群を布地の材質嗜好などによる被験者の感性の混乱を避けるため、縦5.5cm、横4.5cmのパントンカラーペーパーに置きかえ、グレー(N5.5)の台紙、縦10cm、横8cmに貼付し、各色にA~Hの記号を付した。

5. 調査は、1981年5月~6月の間隔日、10時~15時の間、北窓室において、被験者の嗜好順位にカラーカードを置き並べ、記号(表1-2参照)を記入させた。調査の正確さを期するため30分以上の時間をあけ、3回行った。同時に、第一印象の強い1回目調査時の1位と8位に選んだ色については、イメージの評価も記入させた。調査時期の気候条件は、(表1-3)に示された状態であった。

6. 資料の整理は、被験者ごとに行った順位配列3回の一致係数を Kendall 法を用いて算出し、 χ^2 検定の結果、5%内の水準の有意差を示した193名を有効資料とした。(表1-4)

次に、嗜好の順位については正規化順位法により測定し、嗜好要因については、1~5の尺度値を与えウェイトを算出し、t 検定を行った。

III 結果と考察

1. 嗜好順位

嗜好の順位を嗜好順位表(表2)によってみると高齢者の嗜好順位は、1位E色(ベージュ0.575)、2位D色(紺0.572)、3位H色(ブルー0.456)であった。()内の数値は各色の順位値を示す。これらの3色への嗜好が強いことを示している。Y群の1位はH色(ブルー0.837)であった。

A群内における8位は、いづれの年代においてもF色(オレンジ)であり、Y群においてもF色(-0.816)は最下位の8位で、C色(茶-0.662)は7位となっている。A群ではE色(ベージュ)を挙げたものが多く、次にD色(紺)を挙げている。

A群で嗜好順位値が2位のD色(紺 0.572)は、Y群では順位値(紺 0.001)が中位に位に位置しており、注目に値する。

2. 色における年齢別の嗜好出現

1) A色(パープル)(図1-1)

概観するとA群、Y群が、比較的近接した分布曲線を描きA群、Y群とも嗜好順位値は、4位であるが、個々の順位は分散された結果が示されている。

2) B色(グリーン)(図1-2)

A色(パープル)と類似した傾向を示すがY群がA群に比べやや下位を示す。

表1-1 調査票

服色嗜好調査

(1) 次の間についてお答え下さい。

2、3、5、7については該当する箇所を○印でかこんで下さい。

1	生年月日	明治 大正 昭和	年	月	日生	満	才	
2	職業	自営業・自由業・農林漁業・サラリーマン・無職						
3	居住地	市街地域・近郊農林漁業地区・その他						
4	家族数	20才未満	人	20才以上	人	合計	人	
5	配偶者の有無および職業	有・無	自営業・自由業・農林漁業・サラリーマン・無職					
6	最近1ヶ月間衣料品購入のために使った費用	約 円						
7	洋服を着用しはじめた年齢	生れた時から	10才代	20才代	30才代	40才代	50才代	60才代

イ あなたが夏に着るワンピースとして次の8色を好きな順に並べて下さい。

ロ 並べ終わりましたらカードの裏の記号を記入して下さい。

ハ 同じ手順で30分以上時間をあけて3回くり返して下さい。

1回目	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
2回目	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
3回目	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位

(2) 1回目の結果についてお答え下さい。

あなたはどのような理由で第1位の色を選ばれましたか。該当する箇所に○印をつけて下さい。

第8位の色についても該当する箇所に×印をつけて下さい。

	非常に	少	も	少	非
	し	し	ど	し	常
			ち		に
			ら		
			な		
			い		
			で		
1. 快	不快				
2. 細くみえる	太くみえる				
3. 新しい	古めかしい				
4. 清潔な	不潔な				
5. 女らしい	男らしい				
6. 似合う	似合わない				
7. やさしい	きつい				
8. 軽快な	重くるしい				
9. 涼しい	暑い				
10. 華やか	洗い				
11. 上品な	下品な				
12. 無難な	奇抜な				
13. 高級な	低級な				
14. さわやかな	陰うつな				
15. 色気がある	色気がない				
16. 派手(な)	地味(な)				
17. 陽気(な)	陰気(な)				
18. 明るい	暗い				
19. 可愛い	大人っぽい				
20. 若々しい	年寄りみだ				

表1-2 色の試料

慣用色名	試料記号	マンセル記号
パープル	A	5 P 6/10
グリーン	B	10G 5/6
茶	C	5 Y R 5/6
紺	D	5 P B 3/8
ベージュ	E	2.5 Y 8.5/2
オレンジ	F	2.5 Y R 6/14
ピンク	G	2.5 R P 7/8
ブルー	H	10 B 6/10

表1-3 鹿児島市における気温と湿度

平均気温	平均湿度
19℃	69%RH

(1981年5月~6月 平均)

表1-4 被験者(有効資料)の員数

年代区分	70才代	60才代	50才代	20才代	計
年代別人数	35人	34人	51人	73人	193人

表2 色の嗜好順位表

順位	高齢者		20才代	
	色	順位値	色	順位値
1	E	0.575	H	0.837
2	D	0.572	E	0.829
3	H	0.456	G	0.470
4	A	0.168	A	0.024
5	C	0.126	D	0.001
6	B	0.017	B	-0.636
7	G	-0.694	C	-0.662
8	F	-1.125	F	-0.816

A群, Y群ともに, 個人によって嗜好が分散される傾向が見られる。A色(パープル), B色(グリーン)は, 色彩の与える情緒効果が中性的な色であり, 膨張, 収縮の面積効果から見ても無難な色として見ているのではないかと思われる。しかし, 夏のワンピース・ドレスの色としては無関心であると言える。(分散型)

3) C色(茶) (図1-3)

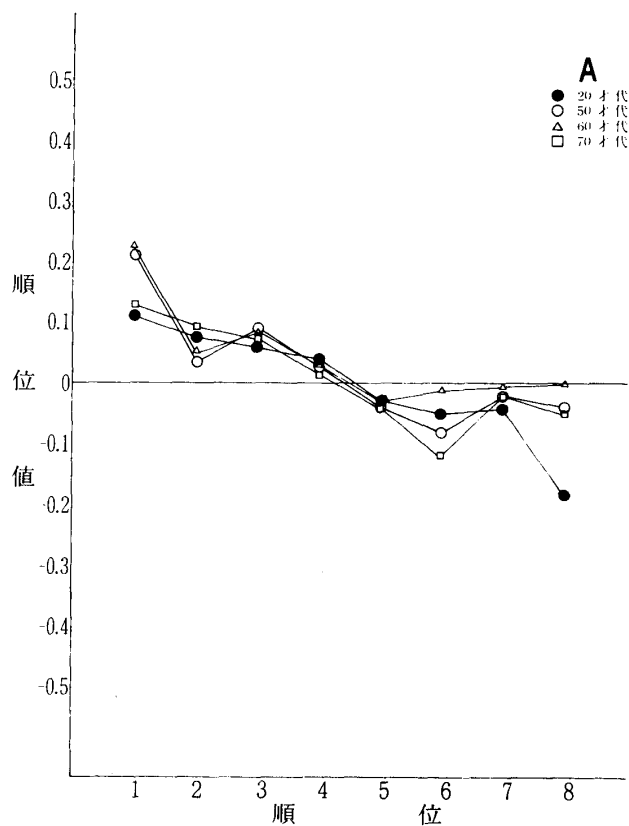


図1-1 A色の年代別嗜好出現

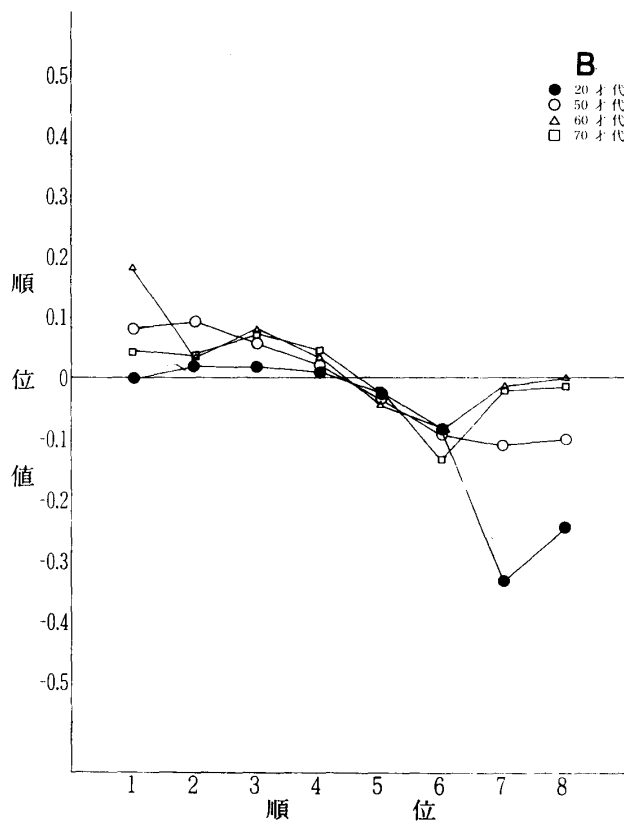


図1-2 B色の年代別嗜好出現

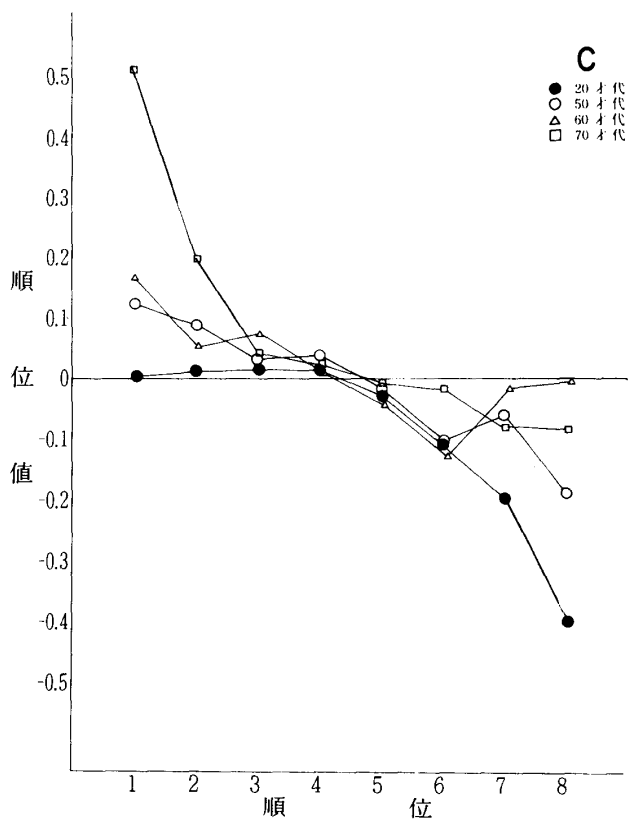


図1-3 C色の年代別嗜好出現

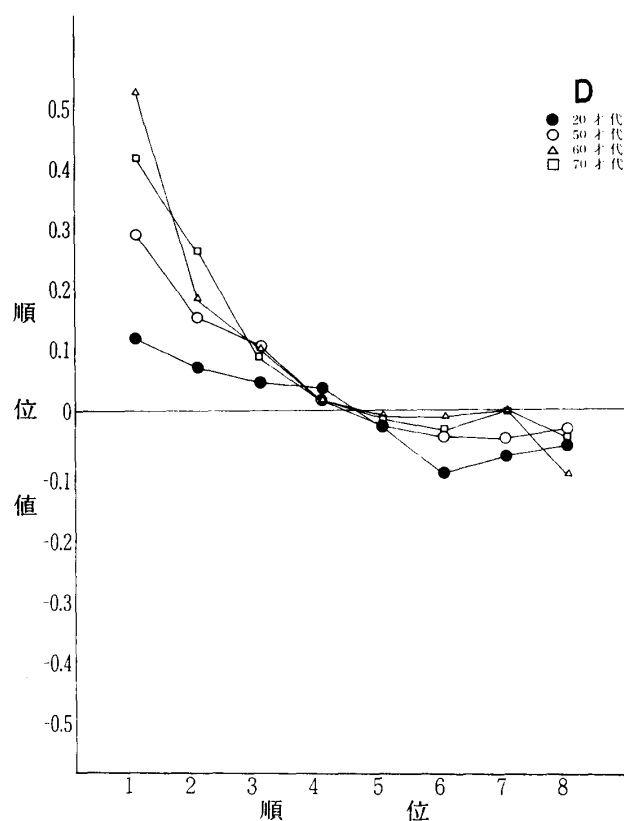


図1-4 D色の年代別嗜好出現

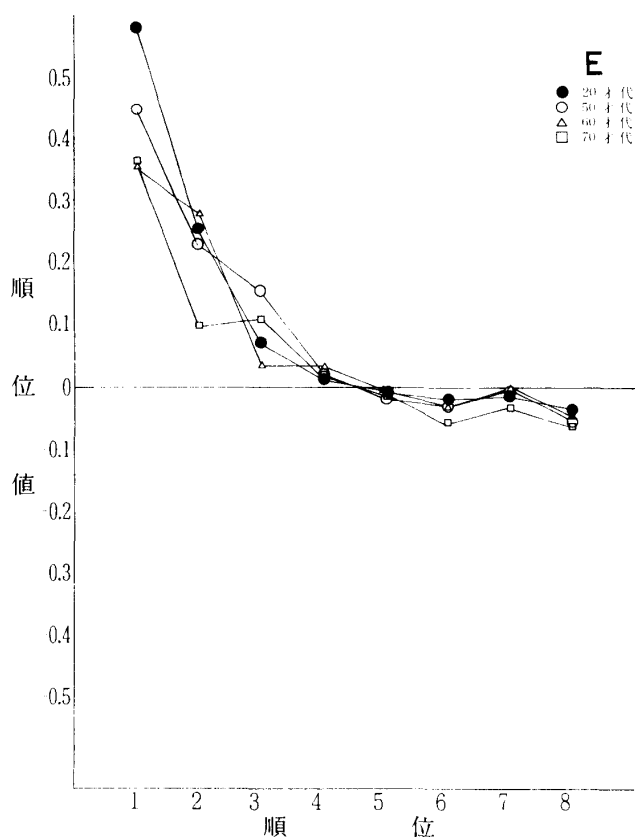


図1-5 E色の年代別嗜好出現

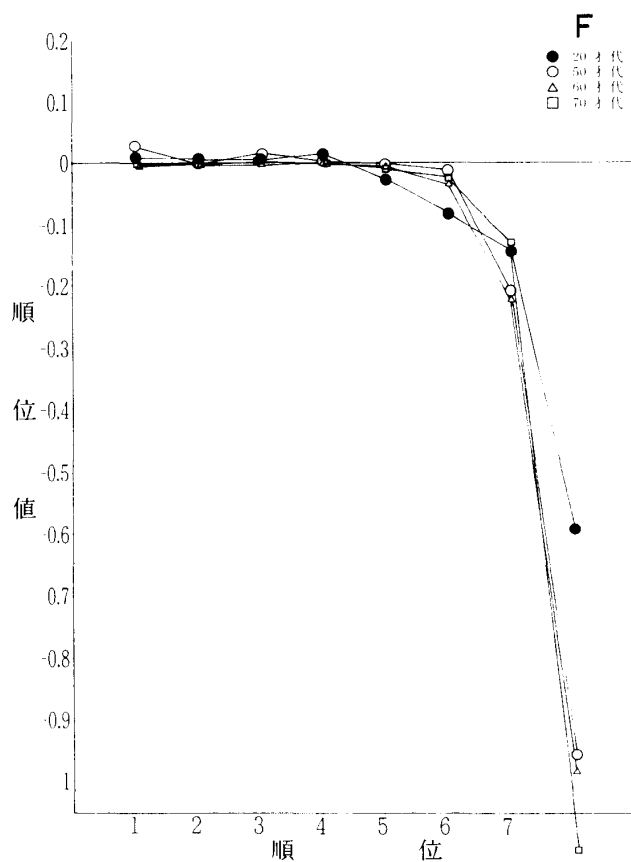


図1-6 F色の年代別嗜好出現

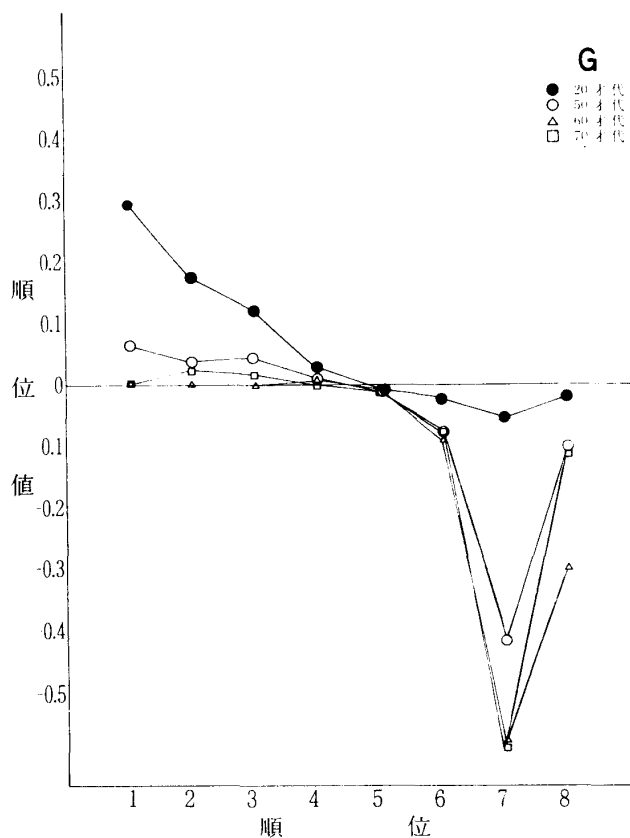


図1-7 G色の年代別嗜好出現

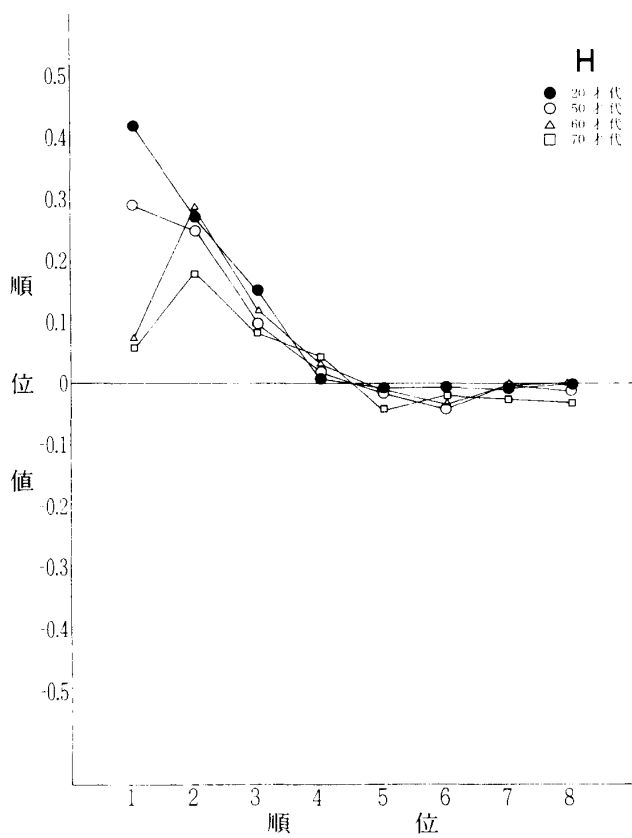


図1-8 H色の年代別嗜好出現

A群とY群の間の嗜好の差が判然としており、高年齢に達する程嗜好され70才代では順位1位を示したものが最も多いのに対して、Y群では、8位を示し逆の傾向が見られる。

このことからC色(茶)は、A群では年齢相応に適した色として選び、Y群では、皮膚の色などと調和しないし、また年寄りじみで見られたくないと言った反発した心理が働いているのではないかと思われる。(相互反対型)

4) D色(紺) (図1-4)

高齢者全般に好まれていることが示されている。60才代、70才代においては、特に好まれている色であることがわかる。20才代においては、特に好きでも嫌いでもない傾向にある。

5) E色(ベージュ) (図1-5)

A群、Y群が近接した分布曲線を示し、類似したパターンの嗜好が見られる。E色(ベージュ)は、順位1位のグループにおいて70才代、60才代も比較的高い出現を示しているが、順位4位以下では、年齢的な嗜好差はみられない。A群、Y群ともに嗜好率は上位に集中しており、いずれにも嗜好されE色(ベージュ)は、無難な色とされているようである。(上位集中型)

6) F色(オレンジ) (図1-6)

どの年代でも下位を示し、A群で1位を選んだ数は少なく、1位、2位を選んだものは、嗜好要因についても個性的な結果を示している。A群では下位、特に8位を示したものが多く、夏のワンピースとして不向きな色としていることが言える。(下位集中型)

7) G色(ピンク) (図1-7)

Y群とA群との動向が全く異質で、二つのタイプに別れ、それぞれの特性を示している。Y群では、上位集中型のパターンを示し、A群では、下位集中型のパターンを示しているし、特に7位に集中していることはF色(オレンジ)の次に好んでいないことが、強く示されている。

8) H色(ブルー) (図1-8)

各年代を通して好まれる色であることが言える。特にY群においては、最も好まれる色であることが示されており、E色(ベージュ)と、H色(ブルー)は類似した傾向を示していると思われる。A、Y群ともにベージュと並んでブルーを上位に選択していることは、夏のワンピース・ドレスに相応しい色として一般的に好まれる傾向を示している。

3. 嗜好要因

図2は、第一印象の強い1回目に指摘された1位と8位の色を選んだ理由を、相極位の20種の用語に対して5段階評価を与えて、平均値を示した。また用語別にt検定によりA群とY群間の差を調べ有意水準(*0.05 **0.01)を図の右端に記した。

図2-1は、嗜好順位1位のE色(ベージュ)の選択要因について、同色を順位1位に選んだ

Y群の要因と比較したものである。A, Y群の1位の選択要因が異なるかどうか, 調べてみたが, 多くの用語に相互間の有意差は認められなかった。このことから, E色(ページュ)に関しては同じ要因で1位に選んでいることがわかる。つまり, 「やさしい」「軽快な」「涼しい」といったことを感じており, 「上品な」そして無難な色として選択している。特に「清潔さ」を要因としており, この色に対し「華やか」「陽気な」「若々しい」では, A・Y群共に平均値は中位に位置し, 年齢における若さの因子に対しては関心を示しておらず, Y群が嗜好順位としてH色(ブルー)に次いで2位に選んでいる理由が理解できる。

図2-2は, D色(紺)のA群1位の選択要因について, 同色を8位に選んだY群と比較したものである。A群ではD色を「上品な」「似合う」に次いで「快適」な色として選択しているが, Y群は「陰うつな」「陰気な」といったうっとうしい色としてD色を好んでいない。

A群で, D色とE色において嗜好順位の差があまりないということは, A群はD色に限らず, 似合って, 上品であることが選択要因になっていることが示されている。

図2-3は, C色(茶)のA群1位とY群8位について比較した。「不快」「古めかしい」「不潔な」「男らしい」「似合わない」「きつい」「陰うつな」「色気がない」「地味な」「年寄りみだ」について有意差があった。Y群では「古めかしい」「陰うつな」「地味な」「似合わない」「年寄りみだ」ことを理由に選んでいないが, A群ではC色について「似合う」ことを強く要因にあげている。また, Y群ほど「古めかしい」「年寄りみだ」については感じていないし, いくらか「さわやかな」色として見ている。

図2-4は, F色(オレンジ)を, A群, Y群ともに8位に選んだ要因についての比較である。A, Y群の間に有意差はあまり認められないが, 「可愛い」と「大人っぽい」, 「若々しい」と「年寄りみだ」また, 「新しい」と「古めかしい」等, 年齢に関しての因子は見受けられた。全体的に見て, 「派手な」「華やか」「奇抜な」といったイメージを持ち「似合わない」を理由としていることが考察された。

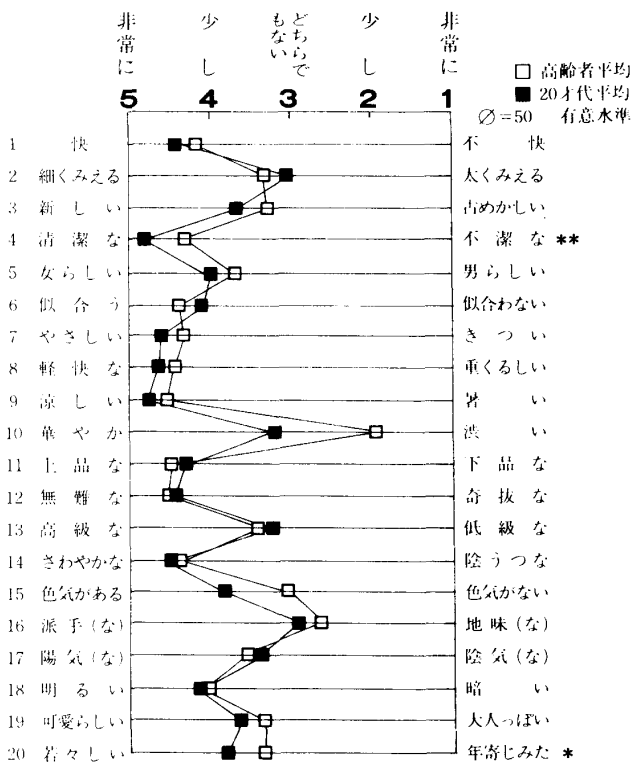


図2-1
E色(ベージュ)の高齢者1位と20才代1位

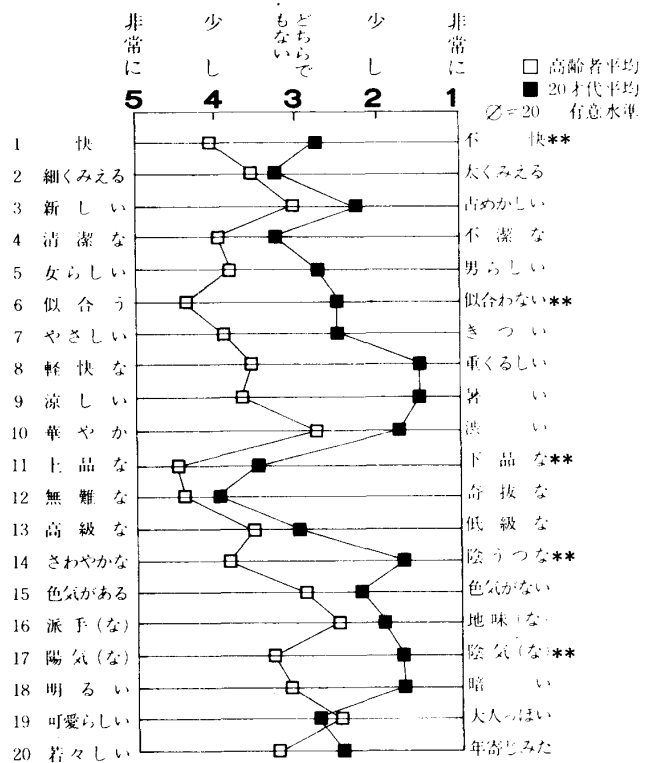


図2-2
D色(紺)の高齢者1位と20才代8位

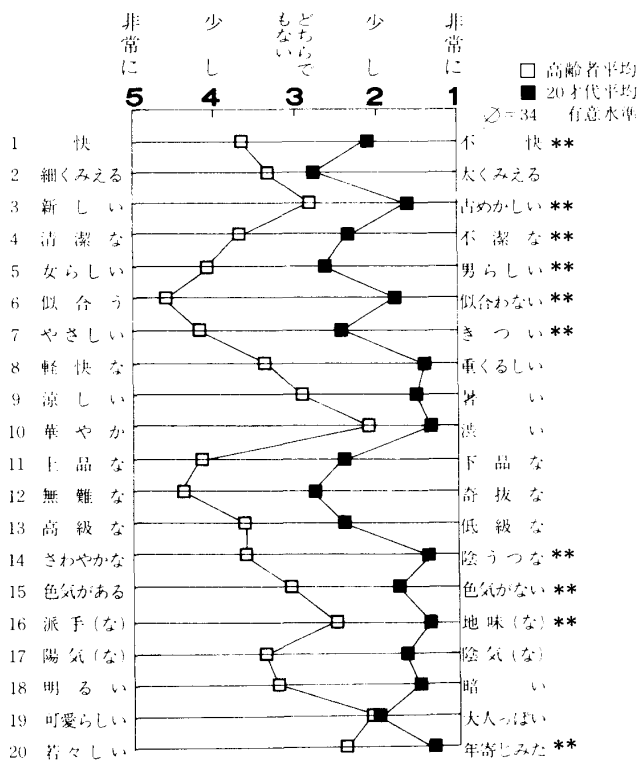


図2-3
C色(茶)の高齢者8位と20才代8位

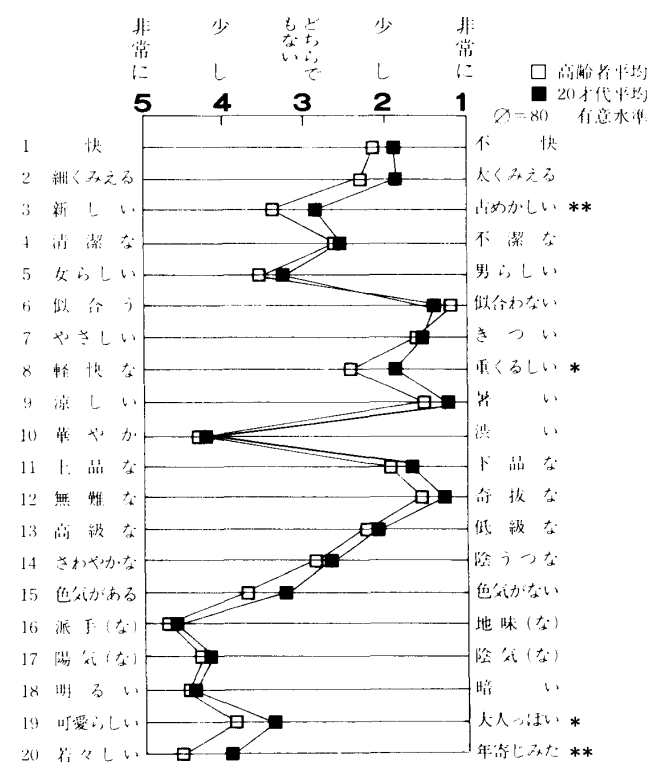
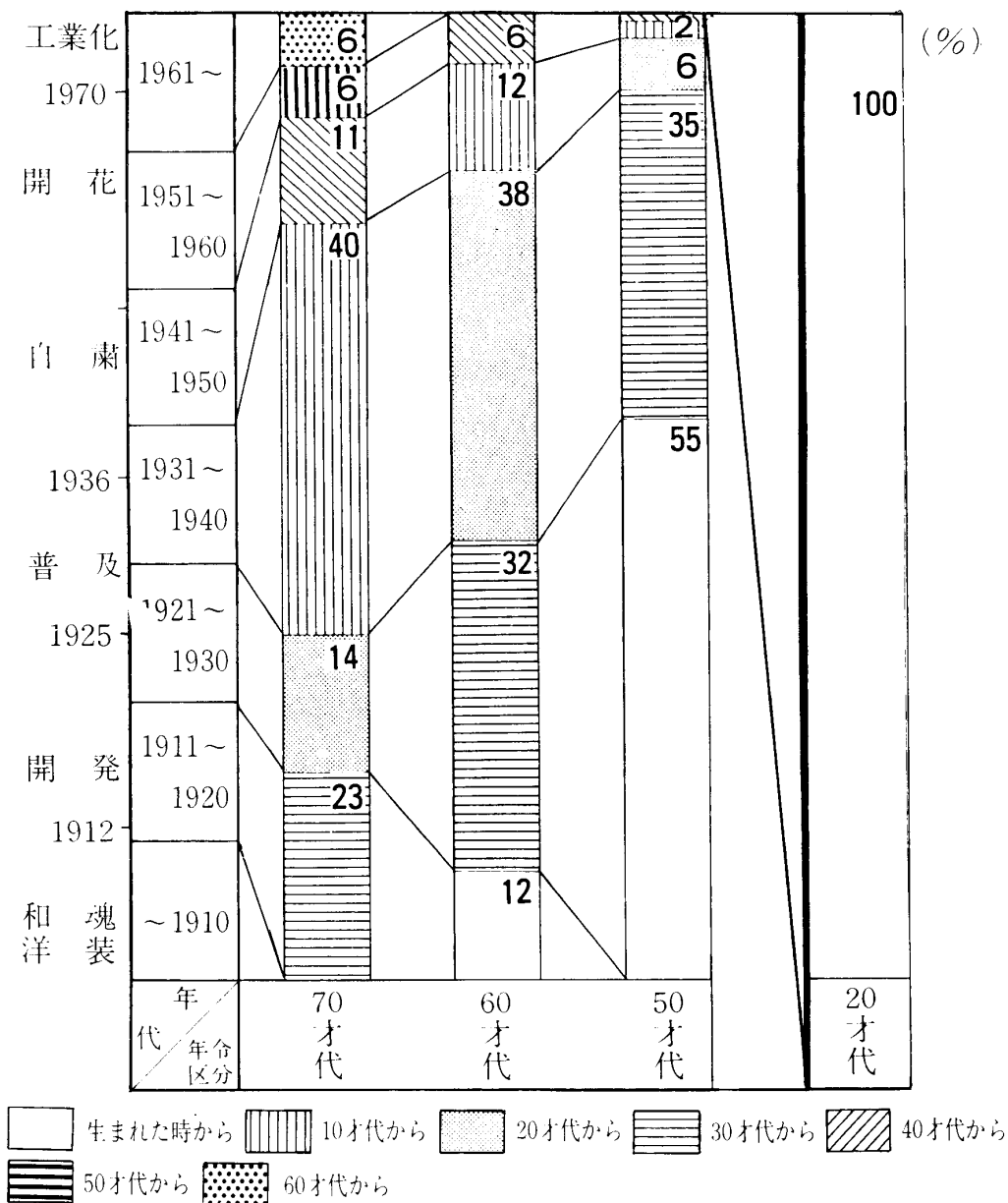


図2-4
F色(オレンジ)の高齢者8位と20才代8位

図3 洋服を着はじめた年代



IV 要 約

色彩の被服文化における重要性を考え、高齢者の衣服における色彩嗜好を調査することによって、色彩に対する感覚をさぐり、色彩嗜好の傾向を解明するため、高齢者婦人（50才代 51名、60才代 34名、70才代 35名）について、夏もののワンピース・ドレスの色彩嗜好と意識を調査、考察した。

(1) オレンジ色 (2.5 YR 6/14) は、高齢者、20才代を通じて、最下位であり全体的に好まれていない。この結果は、1930年からの色彩嗜好調査（橘 報告）における結果と一致した。

- (2) 茶色 (5 Y R 5/6), 紺色 (5 P B 3/8) は, 加齢とともにその順位が上位に移行し, 茶色においては, 特にその傾向が著しい。20才代において7位の茶色は, 70才代において2位となり, 紺色については, 20才代において5位, 70才代では1位になっている。
- (3) 高齢者群において, ベージュ色 (2.5 Y 8.5/2) は1位, 紺色 (5 P B 3/8) は2位, ブルー色 (10 B 6/10) は3位の順で好まれている。高齢者群で1位のベージュ色は, 20才代でも2位を占め, ともに上位に位置し, ブルー色についても高齢者群と20才代との間に, 類似した傾向を示した。
- (4) 50才代における色彩の嗜好は, 20才代に近い傾向を示している。

高齢者婦人の衣生活における色彩嗜好についての研究には, 時代的考察が必要であり, 今回の調査対象になった20才代, そして, その対象にならなかった30才代, 40才代の人達が, 高齢域に達した時の衣服の色彩嗜好は, 現在の高齢者に比べ年齢意識が減少し, 自由な選択態度を示すのではないかと予測される。一般的に嗜好色については, 社会生活環境の影響を受け, 互に相関関係が見られると言われるように, その時代の社会環境により誘因される諸要因と衣服の色彩嗜好の変化との間に存在するであろう何らかの法則性を追求する必要がある, そのためには推移する社会情勢にともなって, 長年にわたる研究が必要であると思われる。

今回の調査にご協力いただいた皆さまに深く感謝を申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 橋 寛勝 『老年学』 誠信書房, 東京 (1971) 335 P ~ 346 P
- 2) 長谷川知夫 他 『老年学』 岩崎学術出版社, 東京 (1975)
- 3) Sillone do Beauvoisin 『老い 上下』, 朝吹 浩訳 人文書院, 東京 (1975)
- 4) 水口ふく・青木誠四郎 『心理学雑誌』 (1926)
- 5) 今井弥生 『家政学雑誌』 16, 5, (1965) 292 P ~ 297 P
- 6) 青木英夫 他 『目で見る女性ファッション』 衣生活研究会, 東京 (1975) 192 P ~ 210 P
- 7) 石川綾子 『図説日本と欧米のファッションの変遷』 家政教育社, 東京 (1974)
- 8) ギルフォード 『精神測定法』 培風館 東京 219 P ~ 225 P
- 9) 青木英夫・柳 洋子 『服装概論, 服装と人間と社会』 源流社, 東京

その他の参考文献

財団法人日本色彩研究所 編 『色名事典 MANUAL of COLOR NAMES』 (昭和48)

原国政哲 『色彩の使い方』 理工学社 (1971)

山口政城・塚田 敢 『デザインの基礎』 光生館 (昭和54)

北村トモエ他 『衣服学会誌』 V01. 25. No.2 (1982)

付記 本研究は, 大阪, 青森, 鹿児島, 三地区の共同研究のうち鹿児島県の資料について考察したものである。